

ガールズ&パンツァー
R e . N o t a H e
r o

M B T — 7 0

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

W o T と W a r T h u n d e r や っ て て 思 っ た 。

「これ基準にガルパンの男子戦車道やらせたら面白いんじゃないかね？」

英国面的考えですねわかります。

でもその考えに至っちゃったからね。シカタナイネ。

ここまで来たらやるつきやない。それが英国紳士！↑なにいつてんだこいつ
というわけで注意事項です。

1 この小説はガールズ&パンツァーの二次創作です。

2 男女の恋愛描写を含みます。駄目だとかたはそのままブラウザバック推奨。

OKという方はこのままお進みください。

3 この小説にはW o T、W a r T h u n d e rの高ランク、高t i e rの架空戦車や計画戦車、M B T、自走砲などの戦車が出てきます。

基本架空戦車や計画戦車の姿は、W o T、W a r T h u n d e rで出てくる物と同じと考えていただければ大丈夫です。駄目だという方はブラウザバックおなしやす！

4 作者の心は硝子です。ちよつとしたことでバラバラになります。誹謗中傷はお辞めくださいませようお願いします。

5 この小説は不定期更新です。

6 これらを許してくれて楽しく読んでくださる読者様はこのままお進みください。

注意事項は増える可能性があります。

では最後に、ガルパンはいいぞお。

第1部『英雄の帰省』

中学時代、中部地方で無名の英雄と恐れられた男子戦車道の少年。景光 結城。
小学生時代の過去に恨みを持ちつつ3年振りに故郷、熊本へと帰省する。

黒森峰学園男子戦車道の数々のライバル校との戦う道へと結城は踏み入れる。

そして、かつて支えてくれた西住まほととの関係を取り戻した中、結城にある思いが芽生えていく。

西住まほは、結城への思いを再び自覚する。
R e . N o t a H e r o , 開 幕 。

目次

n u l l	—	1
(第0話)		
E i n s	—	21
(第1話)		

null (第0話)

静けさが支配する平原。

近くに木々が見えるだけで、視界は青い空と平原、聴覚は小鳥の鳴く囀ずりと木々が揺れ擦り合う音が聞こえてくる。

しかし、ここに居る少年にそれを楽しむ暇など無い。

彼はただ茂みの中に隠した鉄の車両から上半身のみを出し双眼鏡で辺りを見渡している。

「……………いた」

平原を砂埃を舞い上げながら走る数十両の車両、その側面にはかつてのナチスドイツの勲章……………によく似た校章が見える。

「シウトウルム1より各隊へ、敵車両発見。マウスの姿が確認できず、が、おそらく本隊と思われる。並列を組みCラインを北上中、おくれ」

『了解。カイザーよりシウトウルム1へ、発砲許可。1両を撃破、もしくは走行不能にし、できるだけこちらに誘いこめ』

「シウトウルム1、了解」

わずか数十秒の無線のやり取り。直ちに少年は行動する。

「砲主、砲撃準備、目標敵走行中ティーガー」

『了解！一発で決めますぜ！』

「頼む。発砲後直ちに後退、敵をEライン6へ誘い込む」

茂みの中から僅かにはみ出た砲身が動き、ティーガーの側面へと口を向けた。

「射撃よーい……………Schießen！（撃てー）」

砲主が引き金を引く。

それに応じてロイヤル・オードナンス社製L7A3

105mmライフル砲からライフリングを投じて螺旋回転しながら爆炎と共に徹甲弾が発射される。

徹甲弾は吸い込まれるようにティーガーの側面に命中、貫通し行動不能で白旗が上がる。

「命中確認！…おう?!」

ガイン!!と鈍い音が車内に響く。

「操縦者何を聞いていた！全速後退！距離を離してから車体回頭180！」

キリキリと無限起動がうなり、跡を残しながら茂みからその姿を表す。

ティーガーと同じく砲搭側面に校章、しかしその車体は

近代的な物となっている。

「すぐに撃ち返してきたぜ……パンターだったから良かったもののティーガーや王虎だったら殺られてたかも……」

「こいつの防盾がパンター相手には役に立つことがわかっただけでも収穫だよ。」

ふう、と砲主の言葉に戦車のキューポラから上半身だけ出していた車長の少年がため息混じりで答える。

やはり手練れだ。すぐに打ち返してきた。

さすがと言わざるをえないな……と少年は目を細める。

そこでふと、車長は後ろをみた。

何故かはわからない、だが向いた方がいい気がした。

後ろは自分達を追ってくるティーガーを筆頭としたドイツ戦車部隊。

その内の一両……自分と同じように上半身をキューポラから出している指揮者の少女と目があつた気がした。

「……ああ、そうか。やっぱりお前もそうか」

少し、いやそれ以上に解る。

目があつた気がしただけだが……言葉を交わさずとも、あいつならそう思っている。

楽しい。

そうだ、いつか無くした感覚を取り戻したような感じに襲われた。
だからこそ

「お前には、負けられない」

こんなこと、ここに来なければ、ここ帰って来なければ味わえなかった、懐かしいラ
イバル意識。

少年、景光 結城は自然と笑みがこぼれていた……

ああ、来てよかったな……と……。

く 中学時代く

「……………ん」

教室の窓から射し込む光がかなり眩しく感じた。

どうやら机に突っ伏して寝ていたことに景光は気付く。

「……（嫌な夢だったな）……」

思い出したくもないものを思い出してしまった。景光は溜め息をついて落胆した。

そこでふと、前の席の人が自分の方へ視線を向けて来ているのに気づいた。

いや、正面の人だけじゃない。周りのクラスメイトほとんどが自分に向けている。

その視線には同情、呆れ、そんな感じのものが多し。

そして、自分の右側に異常なオーラを放っている人物……担任の体育教師が腕を組

んで怒のオーラを放っているのに今さら気付く。

……ああそっか。そういうえば総合の時間だったか……

そして自分の存在に気づいたタイミングで体育教師はゆっくりと口を開く。

「……景光、言い訳はあるか？」

………死刑確定か。そう悟った景光は開き直る事にした。

「……気持ちよく寝れましたよ？」

「……そうか、いや最近お前さんが頑張って大会などでいい成績を残してちゃんと練習

も頑張ってるのは先生はよくわかってるつもりだ」

お？もしかして許してくれるパターンかな？と景光の期待は儂く散った。

「だが……授業で寝るのは了承できんな」

ボキ！ボキ！と拳を鳴らし始めた担任。

「……………ふふ、怖い」

体育教師の鉄拳が炸裂した。

三重県 亀山市。

街という街はなく、自然豊かなこの市は県庁所在地である津市、鈴鹿サーキットがある有名な鈴鹿市などと隣接している。

特に有名な物はない。あえていうなればヤマトタケルの墓があつたり、日本棚田百景の「坂本棚田」があつたりとわりと名前が聞いたことあるくらいの物があつたりする。

景光はその市の中学3年であつた。

成績はそこそこ、部活の所属は無し。ごく平均的な学生である。

しかし、彼はあることで有名だつた。

『戦車道 男子部』

女子戦車道から数年後に始まった一般的に『男子戦車道』と呼ばれる物で景光は好成績を残していた。

しかし、練習は一時間以上かけて愛知県まで行かないとできないために練習は週に二

回。土曜と日曜に行っていた。

日曜日の夜遅くに帰ってくるため月曜日のあきはきつい。

担任もわかつてはいるのだが教師として注意しなければならぬ。

それが故に、景光は月曜日に怒られる光景はクラスメイトにとっては日常茶飯事になつていた。

クラスメイトも理解してくれているため、景光は充実な中学生生活を送っていた。

しかし、中学3年には受験が始まる。

その進路のことで景光はこの日の放課後教師に呼び出されていた……。

「……景光、本当にこれでいいのか？」

「……いいもなにも、それ以外何かありますか？」

もうあと数ヶ月で願書の提出期間となる……その最後の進路調査で景光が書いたのは地元高校への進学。

だが、毎度毎度担任の体育教師は進路調査の度に景光を呼び出した。

「景光、お前さん戦車道の推薦がいくつかきてたろ。それを全部断つてまで地元高校への進学にするのか？ 推薦なら結果は残さなきゃならぬがある程度の勉強は免除される

「……………その方が」

「いいんですよ先生。元々、ここに来て戦車道をやるつもりなんて無かったですし…」

そう、景光には戦車道をするという道は選択肢にほとんど無かった。

「いや、しかしだな…」

「しかしもなにも、ですよ。先生にはなぜここに引越してきた細かい理由を説明したはずですよ」

景光にとつて、担任の体育教師は校内で一番信頼できる教師といつても過言では無かった。

故に、話た。

何故ここに引越してきたのか、向こうで何があつたのか。

それでも、体育教師は将来の為にと推薦のはなしを持つてきてくれた。

しばらく考えていた体育教師だったが鼻で大きく息を吐くと席を立ち上がった。

その顔は少し迷い……………いや仕方無いというまるで最後の手段を使うか…といった用な表情に景光には感じた。

担任が席を離れて数分後。担任は少し大きめの封筒を手に再び椅子に腰をおろした。

「あまりお前さんに渡したくは無かつたが……………お前さんがもし地元高校への進学の意思を変えないのなら渡してくれと相手のお偉いさんから頭下げてまで頼まれて

な……不本意だが約束は約束。これを見てどうするかはお前さん次第だ」
「？」

少し、深刻そうな表情の担任から封筒を受け取る。

話からして推薦の話だろう。

今頃推薦の話？と思考に浸る。

戦車道の推薦は確かに幾つかあった。

サンダース、プラウダ、他多数。

学園艦からお呼ばれることはほとんど事例の無いことらしい。

しかし、景光はその話を断って地元の高校に進学することをすでに決めていた。

だからこそ、何故自分が地元高校に進学する意思が変わらないならこの封筒を渡して欲しいとわざわざ頭を下げてまで頼む必要があるのか、その理由がわからなかった。

そこまでして自分に来て欲しいのだろうか。

なら自分の意思を関係無しに受け取った当日、担任はこの封筒を自分の元へ持つてくるはずだ。

なら何故………

そう思考しながら差出人名義を確認した時、景光の目は見開いた。

「そんな………何で………何で!!」

自然と手に力が入り、震えた。

封筒の右下に書かれた『黒森峰学園』の文字。

その文字を見た瞬間、戸惑いと憎悪が景光の思考を支配した。

「何で……何で今頃……!!」

それに、担任が『相手のお偉いさんから頭下げてまで頼まれた』といつていた。

黒森峰のお偉いさん、つまり理事長、西住流師範でありながら黒森峰学園理事長を務める『西住しほ』を指している。

「あの時切り捨てた癖に……邪魔つて追い出した癖に……!今頃戻つてこいとても言いたいのかよ!!」

怒り、憎悪。それが景光の思考を支配している中、担任はただじつと景光を見つめていた。

ああ、いつそのことこの封筒を破つてしまおうか……

そう思った。

しかし

「なあ景光、そろそろ正直になつたらどうだ」

えっ……と景光は担任の言葉に驚いた。

……いや、驚いたというより、何か核心的な物を突かれた気がした。

「お前さん、本当に戦車道をやりたく無いのか？」

「それは…」

「なら何故、こつちに来ても続けたんだ？お前さんが止めたいならわざわざ愛知まで通わなくても止めればいい話じゃないか。でもお前さんは続けた。なんでだ？」

「……」

答え無い。いや、答えられない。担任の言葉は遠回しであれど、凶星について来ている。

だが答えられない。

そう、景光は今心の奥底にある物を認めたくなかったのだ。

「お前さん、まだ戦車道諦めてないだろ」

「っ」

自然と顔が渋ったのが分かった。

「いいか？お前さんが本当に戦車道を止めたかったのなら大会でこんないい成績は残しちゃいない。けどお前さんはわざわざ愛知まで通い、こんな成績を残したんだ。それは、お前さんの心がまだ、戦車道での活躍を諦めてないからなんじゃ無いか？」

「…」

凶星だ。自分はまだ心の奥底で期待していたんだ。

どんなに否定されても、追い出されても、心はその諦めないと灯火を燃やし続けていた。

「もしお前さんが諦めてないなら、その学園艦に乗れ。そこにお前さんの目指している物があるはずだ」

…ああ、なんて優しいのだろう。

ここまで捻くれてしまった自分を三年間ずっと見てくれていた担任。

その優しさに感謝した。

封筒をつかんでいた手は力は抜けてはいなかったが、震えは止まっていた。

まるで、決意をした手のように。

卒業式の次の日。三重をたち、熊本へと向かった。

3年振りの帰省となる熊本、入学する黒森峰学園艦へと乗艦する為に。

「……相変わらず、デカいな」

黒森峰学園艦。

かつてナチスドイツが開発、運用しようとしていたグラーフツェツペリン級………によく似た艦影をしている。

が、その大きさは比喩物にならないくらいに大きい。

何せ、この艦の飛行甲板にあたる部分には何万という人々が生活している。

無論かつて生活していた景光自身の故郷………となるのだが、正直複雑だというのが今の気持ちであった。

受験票、及び招待状を見せ特に何も言われずに乗艦した。

「…」

思わず黄昏てしまった。

多分戻って来ないだろうと、二度と踏む事はないだろうと。

かつての、3年前目に焼き付けたはずの光景が今日の前にある。

あの日、後悔に溺れて逃げるように去ったこの艦の光景は、何一つ変わってなどいなかった。

飛行甲板に出て指定の場所へと向かう。

『黒森峰学園 男子校送迎バス』と書かれたバス……には乗らず、隣の明らかな軍用ジープに向かう。

運転手はこちらに近づくと自分に気付いき、驚愕した。

「お前……景光か!!」

「お久しぶりです。先輩」

かつて小学生時代にお世話になった先輩……現在は黒森峰男子校にて操縦士として活躍している。

これもあの人なりの気遣いなのだろうか……。

多少の会話をしたあと、ジープに乗り込む。

オーブントップの車両の為に少し肌寒い。

「そうか、向こうでも続けてたのか……いや中部、近畿の方でいい腕の中学生がいるとは聞いたが……」

「そんな、言うほどじゃありませんよ……ただまあ、複雑な心境でした」

「まあそうだろう。すっかり隊長に練習休んで一人客を迎えに行けって言われたから誰だと思ったが……まさかお前とはな……」

「……あの後、どうなりましたか?」

恐る恐る、そう景光は聞いた。

運転手はため息をつきながらもハンドルを離すことなくゆつくりと口を開いた。

「……大混乱だったよ。『景光が追い出された』ってな。俺からみてもお前は頭一つ抜けてた技術があったし先輩らも楽しみにしてたんだ。そしたら追い出されたって聞いたから今年の一年の将来有望が消えちまったって先輩が頭抱えてた事をよく覚えてる」

「……」

しかし、と続ける。

「一番大変だったのは西住妹だったよ。数日後に訪ねてきて何か知らないかと涙ながらに聞いてきて先輩達もお手上げ状態だったよ……言わなかったんだな」

「……言ったのは、あいつだけですから」

「あいつって……姉の方か」

「ええ……でもあいつはきつと俺を恨んでる」

自然と握り拳となり、力が入った。

「恨む？」

「あいつは、戦車道の練習が本格的に始まってだいぶと性格が変わった。日に日に感情も読めなくなってきた、出ていくと言っても『そうか』って一言言っただけだった……けど、出ていく数日前に……たった一言『行かないでくれ……』って……顔は見えなかったけど……あの時、俺は逃げるようにあの家とこの艦を去った……あいつは……」

「…なるほどな」

そう顎を撫でながら、鼻でため息をつき『勘違いってのは怖いなあ……』と呟いた先輩。

「勘違い？」

「ま、今は知らなくていいさ。言えることはお前の考えは憂鬱で終わるかもしれないってことだな」

「？」

憂鬱で終わるかもしれない？その意味を問いただそうとしたとき、

「着いたぜ」

着いたぜ、とは言われたが何も無い。ただの暗い建物……いや大きい鉄の箱と言った方が正しいか、少し不気味な感じさえ覚えた。

「……何もないっ!？」

突如としてガコンツツという音と共に箱が動き始めた。

「これは……!？」

「そうか、お前さんは初めてか。この黒森峰の高校男子戦車道部は戦車の保有数がサンダースに次いで多い。こんな数甲板の上じゃ間に合わなくてな。そこで。この学園艦ってのは面白くてな。所々に史実の物をそのまま再現した部分があったりする。空

母つてのはエレベーターがついていてな、その下は、」

暗かったエレベーターに光が差した。

「格納庫つて相場が決まつてる」

「…これが、男子戦車道部の整備場……」

広い。ただただ広い。その広さにびつしりと戦車が置かれ、つなぎを着た整備士らしい姿の人や戦車道の人慌ただしく動いている。

「ヴァッフエントレーガー… RU251… 計画戦車や試作戦車がめだつような…」

「あつたりめーよ。そうじゃなきゃ勝てないからな」

「?勝てない?」

「ま、それはお前がここで戦車道をやったらわかるさ…」

エレベーターが止まりジープがゆっくりと低速で走り出す。

「さて、とりあえずお前を隊長のところにつれていく。詳しい話はそこで全部説明するぞ」

「…先輩、女子の戦車道は」

「安心しろ、女子戦車道は甲板で活動している」

それを聞いて安心したような、少し残念なような、そんな気持ちになった。

会いたくない…だが会いたいような気持ちも多少なりともある。

でもここまで来たら嫌でも会うことになる。

覚悟を決めろ。

そうでなければ、心の奥底にある愚かな希望を抱いたまま溺れ死ねと。

女性は複雑な気持ちにあった。

手に持たれている『受験生一覧(推薦含む)』の名簿を見て複雑になってしまった。

一覧の中にある『景光 結城』の文字。

ここに戻って来てくれた嬉しさ反面、自分にあの子に会う資格があるのかという考えが支配する。

そう、女性……西住しほは景光を追放した張本人である。

今思い返せば自分は正常ではなかったのかもしれない。

いや、異常だった。

両親を失い、途方に暮れて狂ったように戦車道に打ち込んだあの子は才の塊、開花さ

せていった。

そして狂ったようなあの子を止めた自分の娘、まほ。

その二人の関係がまほの戦車道の成長の妨げるのではと恐れ、追放してしまった。治りかけてたあの子の心を、再び壊してしまった。

あの子は私を恨んでいる。自分が行った行為は間違いだったとあの子に言ってもきつと彼の憎悪は消えはしない。

でも、せめてまほだけは……と、愛知の名古屋港に寄港した際に三重のあの子の中学に訪れた。

けれども現実には厳しい。担任は『景光からすべて聞いています。その上で、担任として、あなたを景光に合わせるわけには行きません』と言われた。

わかっていた事だ。自分の行為がどれだけ愚かであったと。

けれど、それでも、あの子が近畿で戦車道をしていると、そうきいた時は嬉しかったのだ。

だから、もし彼が戦車道をせずに地元高校の進学を考えているなら、これを渡してくれと。封筒を渡した。

担任は渋々『わかりました……が、これを見せて考えが変わるかはあの子次第です』と一応受け取ってくれた。

推薦枠の一覧に名前があるということは、封筒は彼の手にわたったのだろう。

彼のことは男子校に任せている。上手くやってくれるはず。

きつとこちらから出向かない限り、彼とは会えないだろう。推薦枠であるため、彼は面接のみであり、3月中に許しては貰えないだろうが謝罪を込めてあの子の所へ出向こう。

でも、その前に

「何か御用でしょうか、お母様」

「…いい、まほ。よく聞いて頂戴」

まほが今、あの子をどう思っているか。

3年前と変わらない思いを持っているか、聞かなければならない。

E i n s (第1話)

「先輩、隊長って一体どんな人なんです？」

隊長の部屋へ向かっている途中、率直にその質問を投げ掛けてみた。

「ん？まあ、ゆつたりっていうか……マイペース？みたいな人だよ。普段はあれだけいざとなったら強い、みたいな。まあ悪い人じゃないのは確かだし、あってみればわかるさつと、着いたぞ」

先輩は流れるようにノックすらせず失礼しまゝと入っていつてしまった。

「おやおや、ノックはするよういつたはずなんだけどね」

白髪の、ニツコリしている人物がそう口を開いた。

「別にいいじゃないつすか隊長。それより、連れてきましたぜ」

「うん、ご苦労様。それじゃあ話をしよう。景光 結城君だね？」

「はい。」

「いい返事だ。私は『伊藤 清』。よく名前と性格が真逆だからかわれてるよ。

「……、黒森峰学園戦車道男子部の隊長さ。実際には『参謀本部部长』っていう肩書きだけだね。君のとはよく聞いてるよ。」

戦車道の話、もちろん君の小学部戦車道の頃の事もね。近畿に移り『無銘の英雄』なんて呼ばれてた事も。今回こちらに来る……いや帰ってくると言った方が正しいかな？そのことで学園の方から詳しい話を聞いてるよ。その上で君を受け入れてくれたと言うことは、君は黒森峰の学園艦から正式に認められたということ……君はここで戦車道をする、これに偽りはないね？」

これには黙って頷く形で肯定した。

「うん、それじゃあ『高校生戦車道男子部』について詳しく話そうか。

まず高校生戦車道男子部は基本的にルールが覆される。中学までは女子戦車道と同じルールだったけど高校では基本ルールが『違う』と思つてほしい。

まず戦車の制限だけど戦車道連盟が定めている男子戦車道は基本的にこれと言つた制限はほとんど無いんだ。あるのは『その国で運用された、試作、計画された戦車』だけであつて制限はほとんどない。けど第三世代主力戦車には制限がある。

特に10式戦車なんて強すぎるしね。他には運用前に連盟に届け出をして許可をもらわないと駄目だし」

うんうん、と頷きながら満足するように言う隊長。

「その他に男子戦車道は基本年中競技だね。学園艦に直接攻め込んで来るなんてことがある。」

この前はサンダースがプラウダにシエリダンを投入して資材を強奪したなんて話をきいたよ。これを『拠点戦』って言ってるね。攻められた側を防衛側、攻める側を攻撃側として攻める側は勝利すれば資材が手にはいるし負ければ捕虜。そして防衛側はカウンターとして相手の拠点に攻撃する権利が与えられる……他にもあるけどこれは追々話そうか。

そして何より厄介なルールが『タンクロック』。これは撃破された戦車は数日間使えなくなるというものでね、戦車によってロックされる時間は違うけどロックされてる間は試合にもでれないし修理さえできないんだ。

これを狙って工作兵が戦車の破壊工作をしに来る事だつてある。

そのため特殊カーボン製防弾チョッキは必須だよ。勿論拳銃やライフルと言った火器もね」

そうなると面倒くさい。タンクロックされてる間は戦車に触れられないし、試合と重なれば出撃もできない。そうなったら数量が足りずに行く、なんてこともあり得るだろう。

「二応大会もある。女子戦車道とべつの大会と、男女共同戦車道大会って言うのがね。これは近づいてきたら話そうか。そして、言うまでもなく黒森峰の目標は『全国大会9連覇』、それにプラス『男女共同戦車道大会での9連覇』、『男子戦車道年間名声得点1位』

を目標に活動しているよ。そしてこれは今日君に支給する物だよ。」

そういつて机のしたから取り出した少し大きめのスーツケース。

「中には戦車道の制服、特殊カーボン製防弾チョッキ、そして私からのささやかなプレゼントがはいってるよ。制服や防弾チョッキの事はそこに居る君の先輩に聞くといい。それじゃあ行こうか」

「?行く?何処へです?」

「君の配属される戦車にさ」

隊長達と共に再び格納へ戻ってきた。

よく見ればつなぎを来ている人とごつめのミリタリーチョッキらしきものを来ている人との区別が見てとれる。

おそらく前者が整備班、後者が戦車兵だろう。

思えば黒森峰の男子戦車道がここまで大規模なものだとは思ってもいなかった。

いや、知らなかった。おそらく彼女は知っていたんだろうと思うとため息がでる。

仕方ないか。小さい頃に両親をなくして狂ったかのように戦車道にのめり混んでいたところは対人関係すらまともじゃなかった。もちろん西住姉妹とも。

いま思えばあの時、もつとしっかりしていればあの引き留められた時に恐怖に殺されず一言二言彼女に何か言えたのかもしれない。

戦車道も引越してから元々するつもりはなかった。

なので高校の戦車道に関しては何一つ調べてない。

そして、自分が『無銘の英雄』なんて呼ばれてた事も知らない。

これに関しては呼び名を着けた奴を戦車に縛り付けて引きずり回したい気分だ。

なんだよ無銘の英雄って、エ○ヤか？エ○ヤシロ○なのか？という沸々と何かが煮える感覚がした所で景光は考えるのを止めた。

さて、少し幼い頃の話しよう。

小学二年生時、両親を事故で亡くした。

高速道路での玉突き交通事故、車には自分も乗っていたが幸い怪我は無く、救急隊員により救い出された……が両親はすでに死亡していた。

というより、生き残ったのは自分だけだった。

狂った。何故自分なのかと。生き残ったのは自分だったのかと。

サヴァイバーズ・ギルト。その症状に苦しみ、その苦しみを殺すように戦車道へと打ち込んだ。

この時点、ある意味ではエ○ヤシロ○と似てるのかもしれない……が問題はそこではない。

小学二年生で両親を失って、なにもできないよりはましだと戦車道に打ち込んだ体が、精神が、その無茶に耐えられるはずがない。

その異変に最初に気づいたのが、西住まほだった。

「着いたよ。ここだ」

思考を中断。目の前には大きめの扉があった。

「この中に？」

「もちろん」

とボタンを押すと扉が開かれる。

中は暗く何も見えなかったが何か置いてあるのはわかった。

扉が開ききると同時に照明が点灯。そのシルエットを浮かび上がらせた。

ドイツ戦車特有の灰色。しかしその容姿はティーガーやパンターといった大型戦車では無く現代的となっている戦車があった。

先輩ですらほお……と唸る戦車。

「こいつは」

「そう。戦後西ドイツでの主力戦車となったポルシェ社主体で完成させられた第二世代主力戦車『Leopard 1』（レオパルト アインス）。君の配属されるレオパルトで構成された部隊『シウトウルム』の戦車さ」

第二世代主力戦車。こんな戦車が自分に与えられるとは。

景光は感動と衝撃のあまりに言葉が出なかった。

「ちよ、隊長！」

「ん？」

「（いいんすか!?シウトウルムは…）」

「もちろん。シウトウルム、任務達成率98%の私が持つ直属の超精鋭部隊。そこに彼を入れるのは危険だし、何より西住さんの為ならない、そう言いたいんだろう？」

「（そ、そうですか…）」

「（安心してくれたまえ。承知の上だし何よりこの部隊が一番彼に適任なんだ。それに優遇してるようだが、この部隊に入れば回りも鼻根の目は向けにくいね。そしてなにより）」

「（なにより?）」

「（なにより私はバッドエンドは嫌いだからね！そうならないようになんとかするさ）」

！。』

駄目だこいつ早くなんとかしないと……改めてそう思つた先輩であつた。

「さて景光君。君は2日間の休暇を出そう。明々後日には練習を開始するからここに戻つて来て欲しい。やりたいことはあるだろうし、なにより募る話もあるんじゃないかい？」

「………そう、ですね。陸に行つて花も添えなきやいけないし……」

「うんうん。それじゃあとりあえず連絡船の発着場まで送つてあげたまえ」

「りよーかい」

いくぞ、と先輩に促されて追従した。

「景光君」

「はい？」

「こんな台詞があつてね。『選ぶ道を間違えたら、行きたい所へは行けない』。君はこの2日間で色々あると思うけど逃げたりしては駄目だよ？その道で間違えたら、君は戻れないからね。あまり考えすぎずに、肩の力を抜いていけばいいよ」

「………了解です」

見送る隊長を背に再びジープに乗り込み格納庫を後にした。

「運命というのは選ぶんじゃない。掴みとるんだよ景光君。……あ。もしもし？ええ花を

添えにいくと……はい。それでは……」

自身の母親の話を聞いて少女、西住まほは驚愕していた。

両親を失った結城を、母親であるしほは引き取った。

何故肉親に預けなかったのかと言うと彼の両親は駆け落ちだった為、肉親という肉親と連絡など一切取っていないかった。

幼馴染であったため一緒に暮らす事に苦は無かったが結城の様子は可笑しかった。私やみほの前では明るく振る舞っていたが、戦車道に打ち込むようになった結城はまるで居場所を探しているかのようだった。

それからだろうか、結城の笑顔は作り笑いにしか見えなくなってしまった。

気付いた時には、結城の心身はポロポロだった。

今考えて見れば小学生で両親を失ったのだ。その結城の心は計り知れない。だからこそ、自分が止めなければならぬと、暴走を続ける結城を止めた。いつしか、幼馴染ではなくまた違った目で結城を見ていた。

……………それに気付いたのはごく最近の事だったが。

「はあ」とため息をつき、立ち上がる。

結城は、陸に来ているらしい。

あの時、行くなど言った時に返事が無かった理由を聞きに行くか、と決めると玄関を出た。

「……久しぶりかな……最後に来たのはいつだっけ……」

重いスーツケースを持ちながら『影光家墓地』と書かれた墓石のまえに結城はたつていた。

思つた以上に墓石は綺麗であつた。

おそらく誰かが手入れをしてくれてたのだろう。

「……………ただいま、母さん、父さん。俺、帰つてこれたよ…」

二度と見れる事がないだろうと思つていた両親の墓石に、そう言葉を結城は漏らした。

「さて……………どうしようか」

学園艦から出て既に二時間以上が経過していた。今から学園艦に戻るとしても遅いし、ここら辺はホテルもほとんどない。

となると、自分のいく宛は

「あの家、か……………」

消去方で西住家となる。

…消去法つて言つてる時点で腰が引いてる気がする……

兎に角、このままでは野宿になりかねないので足を動かす。

肌寒いかげが肌を刺激する。

それでも結城にとつては懐かしく感じて仕方がなかった。

3年経つて、細かいところがいろいろ変わっていた。

今は3月中旬、世間の学校ではまだ冬休み。

黒森峰の男子戦車道ももちろん4月からなのだが来るように言われた為にこうして3年振りの故郷を歩いている。

……変わつたな。いや、変わろうとしてないのは俺だけか……

覚悟を決めたが、揺らぐ。

……後悔しかない。だからここそこへは来たくなかった……

「ひどい顔だな。まるで、帰ってきたくなかったと言うような顔だ」

不意に、声が聞こえた。

それも自分へ対するもの。

「まさか、その顔で帰ってきたと言うつもりか？」

「……………いや、そんなつもりは……」

「ならあの時、何故話してくれなかった……？」

……………あの時、あの時か。行かないでくれと、止められた時。

「……私が頼れなかったか？」

「違う！そうじゃない……違うんだ……俺はあの時……ただ、お前の為だと思って……いや知ってたさ……あの人が俺を追い出そうとしてることくらい……でも頼れなかったわけじゃないんだ！……無力な俺を、責めてくれてかまわない……恨んでくれてもいい……けど、信じてくれ、まほ……」

「……知ってたさ」

ゆつくりと近づいてくる

「お前が、追放されそうなのも。お前がそれに耐えていたことも」

「あれは、知った上での私の我が儘だった。だから……」

そして、数歩手前で止まり。

「お帰り、結城」

その瞬間に、頬を涙がつつた

「泣くな、男じゃないのか？全く……」

と、その肩に抱き寄せられる。

「しよががないな。昔の泣き虫に戻ったか？」

「……泣いてなんか、ない……！」

「そこで意地を張るのは、変わってないな。早く泣き止め。みほが家で待ってる」

「……わかった」

スツと離れ。返すべき言葉を返す。

「ただいま、まほ」

「ああ……お帰り、ゆう」